

## 正宗白鳥の花袋評

伊 狩 弘

1

正宗白鳥の書いたものが公になったのは、明治三十四年四月二十二日『読売新聞』の「月曜附録」（総題「月曜文学」、署名は白鳥子）に「鏡花の註文帳を評す」を載せたのが最初で、それから亡くなる昭和三十七年まで六十年以上も文学活動を続け、小説のほかにも多くの批評や随想、戯曲を書いた。天溪や思案の紹介で『読売新聞』に入り、抱月の命名した「よみうり抄」の記者を務め、いろいろな作家らの訪問記事を書き、紅葉や独歩の訃報を記事にしたことは、「予がよみうり抄記者たりし頃」（『読売新聞』大正7・9・4く5）や「読売」にゐたころ」（同、大正11・6・22）などの随想に書いてある。『読売新聞』に在職した明治四十年に『塵埃』を『趣味』に発表して自然主義文学の隆盛する文壇からようやく注目された。明治末から大正初中期には『何処へ』（明治41）や『泥人形』（明治44）をはじめ、『入江のほとり』（大正5）『死者生者』（大正6）などを刊行し、自然派作家として文壇に独自の位置を占めた。昭和四年と十一年には夫人とともに世界周遊の旅をし、戦争中はさすがに寡作であったが戦後は小説・評論などに旺盛な執筆活動を行い、二十三年には『自然主義盛衰史』を『風雪』に、翌年は『内村鑑三』を『社会』にそれぞれ連載し刊行した。思想的には十九歳のとき植村正久から洗礼を受けたが四年後に棄教、しかし亡くなる直前に再度入信し、深沢七郎を呼びよせ植村環に葬儀を頼むよう言伝て、病院で植村環牧師の説教を聞き、「正久先生の説教のように思われる」と語った（正宗つね「病床日誌」）。葬儀は日本基督教会柏木教会において植村環牧師の司式により行われた。このように

白鳥は二ヒリスト的文学人生に徹し、人生最後にはそこから転向せんとしたと思われる。つまり白鳥は二ヒルの奥に醜陋卑小な自己及び人間存在を見下す高いものを措定していたことも確かで、自分の文学作品なども、他作家の小説に対するのと同様に貶すことがあつたけれどもそれは単なる自己満足的自嘲や自己韜晦などではなく、芸術に対する高い標準に基づいたものであつたようである。そこで本論考では、日本近代文学の道標を示し、また尺度にもなつたような田山花袋の文学を白鳥がどう論評しつづけたのか跡付けてみたい。

前出「月曜附録」(明治34・7・1)に「花袋作『野の花』」が載る(署名は「はくてう」)。これは花袋『野の花』(明治34・6)の主として「序」について批評したもので、花袋の主張は後の「露骨なる描写」とほぼ重なる。「明治の文壇も何うか今少し色気が無くなつて、人性の秘密でも、悪魔の私語でも、勝手次第に描くやうになつて欲しい。そうしたならばんやりながらも自然の面影が明治の文学に顕はるゝやうになるであらうが——けれどこれは此頃こんな考が私の脳に往来して居るといふ丈で、決して「野の花」の序といふ訳ではない。」といつた花袋の「自然」論を展開したもので、言わば花袋の夢想である。白鳥はそうした花袋の主張に「我輩も至極賛成」と言うものの、「野の花がその序文にかよへるか否かは疑問」だと述べる。『野の花』自体は二人の女と一人の青年の板挟みの恋を書いたもので、作の末尾は「二人から恋せられた為に自分は二人のどちらの恋をも得る事が出来なかつた、悲しいのは運命！」と終わっており、運命の強調は白鳥が指摘した「可笑し」さを感じ、花袋流のセンチメンタリズムを少しも脱しない。花袋の眼高手低的な欠点は、序文に見られる大げさな意気込みや物言いと、実際の小説の旧套さとのギャップによつて露呈している。白鳥の評言はその点で正鵠を射ている。『野の花』論争として知られるとおり、この批評に対して花袋は「作者の主観(野の花の批評につきて)」「(『新声』明治34・8・15)を書いて反論した。花袋の説くところによれば主観は「作者の主観」と「大自然の主観」の二種類があり、イブセンやゾラの主観は後者に属す。フローベールやツルゲーニフ、ドオデエラの「前の自然主義」は前者、「後の自然主義は全くこれと趣を異にし、漸く大自然の主観に進まんとする如き傾向を生じ来れり。前自然主義は空想神秘の主観を却けて、単に自然外形の形似を得んとし、後自然主義は自然に渴し、自然に朶眈すること甚だ深きと共に直ちに、進みてこの神秘なる人性の蘊奥を捉へんとせり。今日の所謂主観的運動の

勇將烈士は皆この後自然主義の所生にして、一面より見れば樂天厭世兩極觀の一種の聯合とも言ふべく、一面より見れば自然主義と神秘主義の一致とも言ふべし。」云々と述べて、自作の弁護に努めた。白鳥は再び九月二日の「月曜文学」に「花袋氏に与ふ」と題して上・中・下の三段落到分けて述べる。「上」では、早稲田派作家評家の坪内逍遙の影響下にあるとの花袋の言を受けるかたちで、逍遙は花袋の言うようなことは言っていないという反駁。「中」では、大主観小主観とか大自然の主観などの用語の曖昧さ。「下」は『野の花』そのものへの批評で「作中の人物悉く同一模型より成るのみならず、従来君が諸作中の性格と何の相違もなく、且つその情緒君が新体詩中のものに異ならず、運命をはかなみて之に抵抗するの勇氣なく、概して大人しく女性的なるの氣は、君が作の何れにも漂へば、敢へて直ちに之を作者の面影なりとは云はざるも、多くの性格を描き種々の世相を写すは未だ君が力量内にあらずと思へるなり。」と痛撃した。白鳥の批判は肯綮に中るもので、花袋は自らの小説論や描写論の根底を捉え返す必要があつたのだろうが、そうではなく、「主観客観の弁」（『太平洋』明治34・9）において自説を再説した。曰く、「私の所謂大自然の主観と云ふのは、この自然（ナチュラ）が自然に天地に發展せられて居る形を指すので、これから推して行くと、作者則ち一箇人の主観にも大自然の面影が宿つて居る訳になるので、従つて作者の進んだ主観は無論大自然の主観と一致する事が出来るのだ。」云々と言つて、柳浪や天外の作品などは小主観に捉われた、主観のない自然の作品であるとする。花袋の説くところは未熟で理に合わない点が多々あるけれども、この頃から花袋が大自然の主観といふごとき主観主義に重きを置いていたことは、「露骨なる描写」を唱えたことと並列して銘記すべきだ。自然主義時代到来の少し前、所謂前期自然主義直前のこの時期、花袋の軸足は主観主義にあつたと言える。

『蒲団』合評』（『早稲田文学』明治40・10）は星月夜（抱月）の贊辞によつて花袋の文壇的地位を確定したことで知られるが、白鳥もかなり好意的な評価を与えている。明治文学史發展の上で重要なものとして白鳥は『小説神髓』のほかに天外の『初すがた』序とともに花袋の『野の花』の序などの議論だと言う。しかし「作は論に伴はず」で実作は「甘い所」が多かつたが『少女病』と『蒲団』は氏近來の佳作であらう。」と高く評した。「筋は単純で只主人公の心裡を説明したのに過ぎぬが、それがいやに読者の同情を惹くやうに潔白に拵へてないのがよい。（中略）只多少冗漫で印

象が薄くなるやうに思はれる所もある。」と概して好評を与えた。『蒲団』については後の『自然主義盛衰史』では「その対人態度や創作態度に画期的のものがあつたに闕らず、作品そのものは甚しくお粗末なのだ。」と一蹴しているの  
 で、この合評に際しては多少甘かつたのかもしれない。「潔白に拵へてない」ということは要するに芳子をそれまでの  
 花袋作にありがちな純潔の女学生に美化しなかつたことを言う。このことは改めて考えたいが、日露戦争従軍後の花袋  
 の主観は人間卑小観に大きく傾き、その主観から芳子こと岡田美知代や自分のような竹中時雄を創作した結果「潔白に  
 拵へてない」人物像が出来上がったので、花袋の創作観や技倆の問題ではなからう。

2

「新年の文壇」(『読売新聞』明治41・1・5、12、19)は自然主義の最盛期を迎えた頃で、藤村『春』や花袋『生』  
 の年、独歩の歿した年である。余談ながら「一」で漱石『野分』を「吾人はあの作に偉大壮烈の分子は爪垢程もないと  
 思ふ。主人公が浅薄な人間であるのみならず、作者の態度が剽軽で滑稽的の者だ。寧ろ壮烈でないところに作者の特色  
 があり妙味がある。」とまだ二十代の白鳥が『中央公論』の『丁未文壇評』を全面的に否定しているのも、夏目漱石や  
 『中央公論』がまださしたる権威ではなかつたとはいへ、新鮮な威勢のよさを感じる。『丁未文壇評』は樗蔭の筆ではな  
 かつたのであろう。樗蔭は中央公論に入つて間もない二十六歳の青年で、この年三月の『中央公論』に寄せた『五月  
 幟』に対しては、角帽と袴の樗蔭が下宿を訪れて「今度のあなたの小説はいゝですなあ。」と褒めたので白鳥が驚いた  
 (『文壇的自叙伝』『中央公論』昭和13・2・7)とあるように、この年あたりから付き合いが始まつた。「二」の作家ご  
 との作品評の中で「花袋氏の『県道』は肉欲を描いたもので、背景の淋しい漁村の描写が巧みだ。氏の新年の作中では  
 これと早稲田文学所載の『一兵卒』とが傑れた者だ。後者は兵士の死際の心的状態を描いたもので、作者の態度が幼稚  
 な空想的でなく観察が深刻だ。去年の『臨室』より一層価値あり、新春文壇の佳作である。」と脚気死や下層庶民の描  
 写を「幼稚な空想」ではないと言う。後年の白鳥に比すると幾分微温的な批評態度である。

「書物と雑誌」（『読売新聞』「日曜附録」明治41・3・29）は、『村の人』（如山堂書店、『重右衛門の最後』など三作を収録）について、特に『重右衛門』を「人間の力の小にして自然力の大きなることを、不具者によつて現さんとしたもの。叙景もよく、主人公の絶望的反抗も読者の胸に響く、只会話には拙い所が多い。」の表現もやや微温的で、花袋における「自然」の無制限な濫用についての疑問などは見られない。

「実生活と文芸」（『無名通信』明治42・10）は談話筆記であるが、「田山さんの小説ですか、僕は皆いゝ作だと思つて読んでゐます。（中略）殊に最近の『妻』の如きは、茲二三年來稀に見る傑作だと思つてゐる。」と語つてゐるのは意外の感がある。白鳥が『妻』を高く評価しているのは独自の評価基準を持つからだろう。「文学雑評」（初出不明、『白鳥隨筆集』所収、文末に「十三年五月」とあり、大正十三年の執筆と推測できる）に「私はいつもいふ通り趣味性に乏しい、凝つた文章の妙味はわからないのであるが、しかし、自分は自分だけの嗜好を持つてゐる。」と言ひ、「一葉鏡花漱石の三巨匠に対してだけは、私は、昨今の世人の認めてゐるやうな価値を認めないのである。」と言ひ白鳥であるから、一般的には自然派的な凡俗の文学を愛好したのであらう。

順序が前後したが「最近の文学界所感」（『太陽』明治42・2・1）も談話で、「田山君の『おし灸』も面白く読んだ。私は田山君が新年に書いた物の中ではあれが一番好いと思つた。」と述べる。その他では藤村の『一夜』と『苦しき人々』を推奨している。いずれも『藤村集』に収められた短編で、『一夜』は『家』の下巻に同内容が綴られる従妹のお仙、正太の妹の失踪騒ぎで、『苦しき人々』は巖本善治や藤村の次兄などをモデルにしたものだろう。いずれにしても病んで「保養院」に入院しているところは姉の園の精神病と東京での生活をヒントにしたものだろう。いずれにしても二作とも市井人の希望ない人生を断片的に捉えたもので重苦しい小説である。そこが白鳥の好みだろう。『おし灸』は羽生の建福寺を模したかと思われる寺の本堂を借りる点灸屋を書いた、しまいに男は機屋の細君と駆け落ちする。田舎町の人々の淫奔で軽はずみの様を点描したものでやはり白鳥好みだろう。この世には理想も道義もない、あるのは色と欲だけなのだという卑俗人間観に基づく。

『田舎教師』合評（『読売新聞』「日曜附録」明治42・11・7）は、小林秀三の日記に拘つたために「欺かれはしな

かつたらうか」という評言があり、同時代評として注目されるが、冒頭は「田山花袋は田舎漢だ。虎屋や榮太郎の凝つた御菓子<sup>ごかし</sup>を華奢な箸に挟んで「一つ召し上がれ。」と云ふ雅な所は無いが、手打ちのうどんを腹一杯喰はせて「ああ、喰つた喰つた。」と云ふ満足の快感を与へる。而して満足の一面に重つ苦しい不快感の伴ふのは云ふ迄もない。」との批評は花袋とその文学の感じをよく擲んでいる。白鳥も藤村も田舎者だが、概して名家に生まれた。花袋は微禄の貧乏士族で辛酸を嘗めた。食うことの大変さを骨身に沁みて知つたのは花袋だろう。そして食うことの反対側に空想に浸る楽しさがあったのではないか。さて、白鳥は花袋が秀三の日記に欺かれたのではないかと考えたようだが、実際は岩永胖の調査と考察によれば花袋の想像力は「観察と事実が風景関係では適確にとらえられていて、人間関係では深い追及が不足している」といつた面があつたし、中田遊郭や死亡日時などは意図的改変が為された。白鳥はもつと赤裸々な「ルツソーのやう」な性欲暴露小説を望んだようだが、日露戦争という歴史の表舞台に登場せずひっそり死んだ青年という一種のロマンが花袋の作意の中心だつたわけで、どろどろした欲望は花袋のよく描くところではなかつた。

「机上」(『読売新聞』「日曜附録」明治43・5・15)は既に自然主義の絶頂から退潮に差し掛かつた頃であり、「新聞や雑誌の上で相変らず評論は盛んだが、私の心を動かす者は少ない。」という。そんな中でも「今月の評論では田山氏の『インキ壺』にのみ、味ふべき意見があつた。我々と年配が違ふだけに全然同意し得ない所のあるのに関らず、その経験から得た命のある観察がある。一歩々々現実を見て四十に達した氏の姿を窺ふことが出来る。」と年輩者の人生経験に敬意を表しているのは二ヒリスト白鳥の見解だけに重みを感じる。さらに「私は自然主義の議論としては花袋氏と泡鳴氏とのに最も力があり光があると思ふ。借り物ではなくて根底から溢れ出でる。一寸した風にも動かされるやうな所がない。」というあたりは過褒のような気もする。この五月末で白鳥は読売を退社する。

「新年雑誌読後の感」(『読売新聞』明治45・1・7、9〜11)では花袋の『別るゝまで』『客』をさなきもの(『早稲田文学』)初出以来『幼きもの』を取り上げている。

花袋氏の作は、いろ／＼の男女の会話が同じ調子であつたり、平凡な鈍い文句が連続してゐたりして、部分々々に面白い所は少ないが、しかし、全体に人間の臭ひの濃く出でる所が氏の特色である。氏の作は泥臭いと云はれ

てゐるが、その泥臭い不意気な所が氏の強味であつて、人間は本来泥臭い者ではなからうか。藤村氏の此頃の作物には煩惱が描かれ出したが、まだそれを上品に見せようとしてゐる所がある。これに反して花袋氏は遠慮なく剥き出しに出てゐるので、何処か手強い所がある。

そして手強く正直に突き進んで行くかはりに其の中に没頭して、左右を顧慮しないから、作者の叙情文のやうになることがある。詩として滑稽に見えるのもその点だ。生柔しいセンチメンタルな者と見えるのも其の点だ。この頃氏をよく描く男女間の関係でも、何時も女の方がよく浮き出て来ない。『髪』にしても女の平凡な会話や挙動はよく書かれてありながら、男の煩惱や憤慨が何だか独り相撲を取つてゐるやうで、読者の方で身に染みて歎息されやうがない。

右引用は花袋の自然主義時代の作風を考える上で示唆的である。花袋はこの時期無知で多情多淫な下層の民を好んで描いた。それは克明詳細な観察から生まれたというより、断片的知識や見聞から想像を膨らませたものといつてよいだろう。柳田国男から知つた情報を花袋流に脚色したものも多い。そのような作風を穿つた指摘である。

「今月の小説」（読売文壇）大正3・5・5、6の頃は、花袋の文学人生の漸く落照に差し掛かる時期で、『時は過ぎゆく』や『一兵卒の銃殺』という長編の手前に来た頃であるが、「田山花袋氏の『風雨の夜』（中央公論）は、この頃読んだ氏の作中での傑れた物だと思つた。私は氏の新年の數種の作物を読んだ時その中、極めて短い中央文学の『湖上』（？）が最も私の好みに適つたのを覚えてゐる。この作があれと調子が似てゐる。花の咲く頃薄命な女が死んで赤の他人の手で埋葬されるといふ事件が、絵のやうに描かれてゐて、哀愁の情が前面に漂つてゐる。」などと文章技巧の熟達に言及した。明治の末に花袋は飯田代子を囲い者のやうにし、又自然主義の退潮とともに作風はしだいに以前のセンチメンタルなものに帰り、宗教的境地にも接近しつつあつた。それは一種の作風の落ち着きにも似ていた。

## 3

「読んだ後で」（『読売文壇』大正3・6・16）は冒頭に永代美知代子『蛙鳴く声』に対する感想が綴られ、『蒲団』の芳子が明治文学史の生き証人として活動していたことが分かる。「秋声花袋両氏の『明治小説史』には文章と内容の変遷が一通り明晰に叙述されてゐる。これを読んで、今日の日本の文学が幾多の先輩の力によつて築き上げられたことが察せられる。文体が言文一致と極るのさへ容易なことではなかつた。」などと述べて、さらに広津柳浪の功績はより大きかつたのではと柳浪再評価の必要を説く。

『一兵卒の銃殺』を読んで」（『早稲田文学』大正6・3）は、同作を大いに称賛している。「この作を読んだ時にはこの一二年間日本の小説を読みながら感ずる倦怠な気持とはまるで違つた刺戟を得た」とか「この作は花袋氏の無数の作中の傑作」「作家としての氏の価値を低く引き下げようとしても、下げることの出来ない作」などの賛辞を呈している。後々には白鳥は花袋をむしろ馬鹿にしたような批評態度をとつたけれども、こうして見ると白鳥は存命中にはずいぶん花袋を高く買つていたことが分かる。

「田山花袋氏について」（『文章世界』大正6・4）は「田山君とは個人的にさう懇意にしてゐるのではないが、随分古くからの知り合ひで、この頃でも年に一度くらゐは懐しい気がして代々木のお宅へお訪ねしてゐる。」云々と花袋との長い付き合いを振り返りつつ、「氏は文壇の巨人」「世間普通の批評に雷同して、氏のセンチメンタルな所がいやだと思ひながら、矢張り私はそのセンチメンタルな所に共鳴を感ずる」「トルストイもツルゲネエフも自然主義の作家である」ともに人道主義者であつたが、田山氏もさうだと思ふ。田山氏の作には人道を蹂躪ふみにじつたところは決してない。個人としては殊にさうである。」などと注意すべき指摘をしている。白鳥はやはり花袋に対しては特別な思いがあつたようだ。

「田山徳田両氏について」（『文章世界』大正9・11）は「一年間田舎にゐた間に岩野君が死んだ。」と始まつて、明治



の文学者のいかに恵まれなかったかを回顧し、「今年五十歳に達した田山徳田両氏のために、社会的に盛んに祝賀会を開く計画があるといふ報知に接した時に、私は明治の諸作家の短命であつたこと、貧しかつたこと、社会的にいろいろ意味で冷遇されてゐたことを先づ感じた。」と続ける。藤村も明治時代の文士の不遇悲慘を目の当たりにしてきた体験から、度々そのような感慨を書きつけたが、白鳥も同じ思いだつた。日清・日露の戦争にも比すべく、文士たちの道のりも苦闘の連続で、藤村の有名な「人生の従軍記者」の言も決して傍観者の気楽を意味するのではなかつた。白鳥はさらに「自伝小説肉慾小説が、矢鱈に書かれたのも田山氏がその源をなしてゐる。」「芸術上の一つの冒険であつた。革命であつた。」とまで言つて賛美しているのは興味深い。

前後するが、「事実と想像」（『中央文学』大正6・4）では「田山花袋氏が『蒲団』などを書かれた時分から、小説といふものは自己の経験を有りのまゝに文字にすべきものだといふ考へが非常な勢ひで流行して、自然主義反対論者でも、田山氏の作風を憎悪してゐる人達でも、何時となしに自分の日常生活を臆面なく筆に上して小説と名づけるやうになりました。（中略）一部の評家の嘲りを買つた『蒲団』などは甘いもので、どの作家もく猛烈に自分の恋愛事件を一つや二つは書くやうになつたことを思ふと、人間の模倣性に驚かれます。」と書く。白鳥が花袋を評価するのは、文壇という狭い標準を当て嵌める限りであり、より高いスタンダードを想定すればあまり評価できないのであろう。

大正の後半、花袋は歴史物に手を染めるかたわら大正十二年と昭和三年の二度、満州や朝鮮旅行に出掛けた。若いときから日本国内を隈なく廻つて紀行文を書いたが、海外は日露戦争の従軍とこの二度の満州旅行だけである。この間、歴史物の外に『魔駅』『恋の殿堂』や『百夜』などの作品が書かれるけれども、白鳥の批評はあまり見られない。昭和三年の年末に飯田代子の家で脳溢血となり、翌年五月に喉頭癌を患い、一時は好くなったものの昭和五年五月十三日亡くなった。新暦でいうと花袋は一八七二年一月二日生れなので、満五八歳である。同様に徳田秋声も明治五年二月生まれ、藤村も三月であるからこれら自然主義の三大家のなかで花袋は最も早く亡くなった。

「田山花袋氏について」（『週刊朝日』昭和5・5・25）は追悼文で、いろいろと思ひ出やら何やら並べた後、やはり『蒲団』や『生』は「自然主義初期の標本的作物」と言い、「明治文学史上に残した田山花袋氏の跡は大きい。」と花袋

の功績を認めている。泡鳴はかつて花袋に向つて、君が一番長生きするだろうと語つたという。その泡鳴は四十七歳で早くに亡くなり、羸弱を自認した白鳥は八十三歳まで長生きしたのは皮肉である。稿を次いで考察を続けるが、この度はここまでとしたい。

注

(1) 岩永胖『に自然主義の虚構の可能性』(桜楓社、昭和四十三)参照。

(2) 『中央文学』は大正六年四月から十年十二月まで春陽堂から出た雑誌が知られるが、これとは別に大正三年ころにも同名の雑誌があつたようだ。花袋は『湖上』のほかにも談話や『海の小品』を載せている。『湖上』と『海の小品』は『赤い桃』(自然と人生叢書第四編——島崎藤村・田山花袋・徳田秋声編)(春陽堂、大正七・三)に収録された。

付記 白鳥については『正宗白鳥全集』(福武書店、昭和六十)を用いた。